

## 87 誌上発表 『鍼灸節要』に見える医経の引用

橋本 典子

日本鍼灸研究会

明の高武が撰じた『鍼灸節要』3巻(1537)は、主に『素問』『靈樞』『難経』から経脈や鍼法などに関する経文を摘録して分類した鍼灸書で、合刻された『鍼灸聚英』の「前集」(『鍼灸聚英』凡例)にあたる。著作の趣旨は「不遑其原、則昧夫古人立法之善、故嘗集節要一書」(鍼灸聚英引)という言葉によく表れている。以下、『鍼灸節要』に見える医経経文を調査し報告する。底本には『臨床鍼灸古典全書』第49巻所収本(オリエント出版社、1993年)を使用し、校勘資料として、『素問』は顧從徳本、『靈樞』は明刊無名氏本、『難経』は慶安本、『難経本義』は『難経本義大鈔』の本文を使用した。

『鍼灸節要』の医経の書目別引用回数と所出箇所は次の通りである。(丸括弧内の数字は回数。但し、連続した引用条文を1つと数え、断続的なものはそれぞれを数に加えた)

巻1では補瀉・刺鍼の深淺・五俞穴・経脈などに関する項を立て、『難経』から十二難(1)、二十三難(1)、二十六難～二十九難(1)、四十五難(1)、六十二難～六十九難(1)、七十難(2)、七十一難～八十一難(1)を引用し、各難に『難経本義』に由来する滑氏注(35)、楊氏注(2)、丁氏注(1)、項氏注(1)が附される。他に紀氏注(4)、『素問』宝命全形論第二十五(1)、『医経溯洄集』瀉南方補北方論(1)、『此事難知』経脈終始(1)、『濟生拔粹』巻二・経絡取原法(1)、巻二・王海蔵抜原例(1)、巻二・潔古刺諸痛法(1)を援用する。

巻2では、前半は各種の刺法、後半は病證別の刺法に関する項を立て、『素問』からは陰陽応象大論第五(1)、異法方宜論第十二(3)、診要経終論第十六(5)、経脈別論第二十一(4)、蔵気法時論第二十二(5)、血气形志第二十四(2)、宝命全形論第二十五(3)、八正神明論第二十六・離合真邪論第二十七(2)、通評虚実論第二十八(5)、刺熱第三十二・刺瘡第三十六・刺腰痛第四十一・痿論第四十四(1)、厥論第四十五(2)、病能論第四十六(1)、奇病論第四十七(2)、刺要論第五十・刺齊論第五十一(1)、刺禁論第五十二(2)、刺志論第五十三(1)、鍼解五十四(4)、長刺節論第五十五(5)、気穴論第五十八(2)、骨空論第六十(7)、水熱穴論第六十一(2)、調経論第六十二(7)、繆刺論第六十三(6)、四時刺逆從論第六十四(2)、刺法論第七十二(6)、微四失論第七十八(1)を、また『靈樞』からは九鍼十二原第一(8)、本輪第二・小鍼解第三(1)、根結第五(2)、寿夭剛柔第六(1)、官鍼第七(8)、終始第九(9)、経脈第十(1)、経水第十二(2)、経筋第十三(1)、四時氣第十九(2)、癲狂第二十二(1)、熱病第二十三・厥病第二十四(6)、病本第二十五(1)、雜病第二十六(15)、周痺第二十七(1)、口問第二十八(15)、五乱第三十四(1)、脹論第三十五(3)、逆順肥瘦第三十八(6)、血絡論第三十九(1)、陰陽清濁第四十(2)、陰陽繫日月第四十一・病伝第四十二(1)、順氣一日分為四時第四十四・背腧第五十一(2)、論痛第五十三・水脹第五十七(1)、玉版第六十・五禁第六十一(4)、陰陽二十五人第六十四(1)、五音五味第六十五(2)、行鍼第六十七・上膈第六十八・憂恚無言第六十九・寒熱第七十(1)、邪客第七十一(2)、官能第七十三(6)、刺節真邪第七十五(9)、衛氣行第七十六(1)、九鍼論第七十八(5)、癰疽第八十一(2)を引用する。上記以外では『素問入式運氣論奥』論治法第三十(1)が見られる。

巻3では経脈病證・絡脈・経筋・俞穴・同身寸などの項を立て、『素問』から気穴論篇第五十八・気府論篇第五十九・骨空論篇第六十(1)、『靈樞』から本輪第二(1)、経脈第十(3)、経筋第十三・骨度第十四・脈度第十七(1)、『十四経發揮』から奇経八脈(2)が引かれている。